

聖書の中の心情圏

第1回 統一原理（み言）と実践

（1）統一原理（み言）と実践

み言を合理的に理解して信じる信仰を観念的な信仰であるといいます。観念的な信仰は、知的にのみみ言を受け入れようとする動機によって形成されます。私たちは、一番目にこのような観念的な信仰を経て、二番目に意識的な信仰を経て、三番目に習慣的な信仰を経るようになります。習慣は自分が正しいと考え、反復をして形成されるものなのですが、悪い習慣は、自分の信仰に害を及ぼし、良い習慣は反復することによって自分の信仰を丈夫にします。

習慣的な信仰を経たのちには、最終的にみ言を受肉し、心霊を成長させる心情的な信仰へ成長して生霊体を育て上げなければなりません。このようにみ言が私たちの心の中に受け入れられて心情によって生霊体を育て上げることが、まさしくみ言の目的です。

み言を知的に受け入れ、行動的に反復し、心情的に受肉し、生霊体を育て上げることが信仰生活なのですが、途中でとどまりやすいのです。多くの人たちが知ることにとどまり、意識にとどまり、習慣にとられるのを見ると、それで復帰歴史がこのように延長されたということを知ることができます、本質的に深く入っていけなかったということを知ることができます。

そのように悟るならば、悟ったことに対する責任を負い、行動しなければなりません。心では嫌でも悟ったことに対する行動を反復しなければなりません。宗教儀式というものも心では嫌でもしきりに反復するならば、その反復を通じて真実が誘発され、真実なる心情に到達するようになります。

真実なる行動は、み言によるとき現れます。これが真情です。話を上手にする人に対する時も、形式的に「上手だ」と言わずに、その人に対して大切に思う心をもたなければなりません。あいさつをする時にもその人を心から尊く思うことが真情です。賛美歌を歌う時にも、心から歌うのと、曲と歌詞を知っているからとただ歌うのとでは、大きな差があります。心から歌わなければ形式的になりやすいのです。真情でもって歌えば心の刺激になります。このようになるならば、自分がもっと大切になります。

生活の中で悟らなければどうすることもできませんが、悟ったならば悟ったように行動しなければなりません。悟ることによって自分で自分を主管するならば心が真実になります。

（『聖書の中の心情圏』 p15 「統一原理（み言）と実践」より）

※語句解説

●生霊体

霊人体は人間の肉身の主体として創造されたもので、靈感だけで感得され、神と直接通ずることができ、天使や無形世界を主管できる無形実体としての実存体である。（『原理講論』p86）

霊人体は肉身を土台として、生心を中心として、創造原理による秩序的三期間を通じて成長し、完成するようになっていくが、蘇生期の霊人体を霊形体といい、長成期の霊人体を生命体、完成期の霊人体を生霊体という。（『原理講論』p87）

●受肉

本来「受肉」とは、神の言（ロゴス）が人となり、イエス・キリストとして生まれたことを意味します。原理的に言えば、イエス様はみ言の完成実体者として降臨されました。ここで言う「み言を受肉する」とは、み言の実体になることを意味します。

（2）解説—信仰が生活化されるまでの段階

信仰生活を歩んでいると、学んだみ言と実際の生活との間に、大きな距離があることに気づかされます。頭では理解しているのに、生活はなかなか変わらない。この経験は、多くの信徒が共通して持っているものではないでしょうか。

今回引用したところは、「統一原理」における信仰の成長過程を、非常に分かりやすく示しています。そこでは、信仰は段階的に成長していくものであり、最終的にはみ言が人格と生活の中に生きて働くようになることを目指している、と説かれています。

まず出発点となるのが、「観念的な信仰」です。これは、み言を理論として理解し、頭で納得する段階です。講義を聞き、本を読み、教えを理解することは、信仰の重要な第一歩です。しかし、この段階では、まだ信仰は知識の域を出ていません。

次に進むと、「意識的な信仰」の段階に入ります。ここでは、み言を実際の生活に生かそうとする努力が始まります。祈りや礼拝、奉仕などを、自覚的に行おうとする姿勢が生まれます。

これは、習慣にまだなっていないため、意識して行わなければすぐに後退してしまう、信仰における緊張の段階とも言えます。信仰が少しずつ行動として現れてくる段階です。

さらに進むと、「習慣的な信仰」に至ります。良い行動を反復することで、それが生活の一部となり、自然に行えるようになります。習慣には、信仰を強める習慣もあれば、逆に信仰を弱める習慣もあります。良い習慣を積み重ねること

が、信仰の土台を丈夫にしていくのです。

しかし、ここで止まってしまいやすいことが指摘されています。知っているだけ、行っているだけ、習慣になっているだけで、心の奥深くまでみ言が届いていない場合があるのです。

最終的に目指すべき段階は、「心情的な信仰」と説明されています。み言が心の中に根づき、自分の人格や生き方そのものとなる状態です。このとき、み言は単なる知識ではなく、命となって働き、心霊が成長し、生霊体が育っていくとされています。これこそが、み言の本来の目的です。

そのためには、悟ったならば行動することが重要と説かれています。心がすぐには伴わなくても、正しい行動を繰り返すことで、やがて心は変わっていきます。宗教儀式や礼拝、賛美も、形式的に行うのではなく、心を込めて行い続けることで、次第に真実の心情が育っていくのです。

例えば、あいさつ一つでも、形式的に行うのと、相手を心から尊く思っているのでは、内面に生じる変化は大きく異なります。同じ行動でも、心が伴うとき、それは自分自身の成長につながっていきます。

結局のところ、信仰とは、み言を知ることから始まり、それを実践し、習慣とし、やがて心そのものが変えられていく過程と言えるでしょう。そして、悟ったことを生活の中で実行するとき、自分自身を正しく主管できるようになり、真実な心が育っていくのです。

信仰生活は、一度に完成するものではありません。しかし、日々のみ言の学びと、小さな実践の積み重ねが、やがて人格と生活を形づくっていきます。自分の信仰が今どの段階にあるのかを静かに振り返りながら、次の一步を踏み出していきたいものです。

第2回 神が一男一女を創造された目的

(1) 神が一男一女を創造された目的

神が一男一女を創造されたのには、目的がありました。聖書のみ言で神は、一男一女を創造なさり、「はなはだよい」と語られました。このみ言は、「一男一女が善男善女として成長して真の夫婦になり、真の父母になって真の子女を率いた真の家庭を成せ」ということです。これが創造目的なのです。これを私たちは今まで知ることができずにいたのですが、知ってみると、簡単な結論だということができます。「神聖なる男性になれ！ 神聖なる女性になれ！」。そうであれば、神聖なる新郎新婦になるというのです。

人はなぜ生まれたのでしょうか。人は生きるために生まれたのです。生きるために生まれたならば、どのように生きるために生まれたのでしょうか。悲しむために生まれたのでしょうか。喜ぶために生まれたのでしょうか。常に喜ぶために生まれたというのです。それゆえに「神聖に生きなさい」ということは自然的なことです。

これは、聖書を見なくても分かる本性的な問題であり、常識的なことです。私たちは、今までこのことを知らずにいました。今なお分からずにいますから、宗教が儀式を反復するようになり、アダム家庭の秘密を知ることができなかったのです。アダム家庭が分からなければ原因（根）が分かりませんから、聖書を文字でしか見ることができなかったのです。

神が一男一女を創造された目的を中心として男性は男性として、女性は女性としての本性と真の根本をいかにしてもち、成長させていくのが私たちの課題なのです。

(『聖書の中の心情圏』 p16 「神が一男一女を創造された目的」より)

(2) 解説—神が一男一女を創造された目的とは何か

この教えによれば、神が一男一女を創造されたのは偶然ではなく、明確な目的に基づくものでした。その目的は、単に人間が存在することではなく、「善男善女として成長し、真の夫婦となり、真の父母となって、真の家庭を成すこと」にあります。

この内容は、創世記において神が人間を創造された後、「はなはだよい」と語られたことの意味として解釈されます。この「よい」という評価は、単なる存在の肯定ではなく、人間が本来歩むべき完成の姿を前提としたものだと理解されているのです。

ここで重要なのは、人間の完成が「個人」で終わらない点です。男性と女性がそれぞれ本性を完成させ、互いに結ばれ、夫婦となり、さらに父母となり、子女

を導く家庭を形成する。この一連の流れ全体が、創造目的の中に含まれているとされています。

この観点に立つと、「神聖なる男性になれ」「神聖なる女性になれ」という言葉は、単なる道徳的勧告ではなく、人間存在の本質的な方向を示すものとなります。

すなわち、人間は自己中心的に生きる存在ではなく、神の性質を体現しうる存在として創造されたという理解です。

さらに、この教えは「人はなぜ生まれたのか」という問いにも答えを与えます。それは、「生きるため」であり、しかも「喜びの中で生きるため」とであるとされます。

ここでいう喜びは、一時的な感情ではなく、本来あるべき姿で生きるときに生じる、持続的で本質的な喜びを指しています。

したがって、「神聖に生きなさい」という勧めは、外から押しつけられた命令ではなく、人間の本性に基づく自然な要請であると説明されています。本来の人間性に従って生きることが、そのまま神の願いと一致する、という理解です。

しかしながら、人類はこの創造目的を十分に理解できずにきました。その結果、宗教はしばしば儀式の反復にとどまり、根本原因に迫ることができなかつたと指摘されます。

特に、「アダム家庭の問題」、すなわち人間の出発点における本質的な問題を理解できなかったために、聖書もまた文字としてしか読まれてこなかった、という反省が提示されています。

「統一原理」は、アダム家庭における墮落の出来事こそが、人類が真の家庭を失うことになった根本原因であると理解します。この出発点を見ないまま聖書を読むと、神が人間に真の家庭を築かせようとされた本来の意図が見えてこないというのです。

ゆえに、信仰生活における課題は明確です。それは、男性は男性として、女性は女性として、本来の性質と根本を正しく理解し、それを成長させていくことです。

この成長は単なる知識ではなく、人格と生活の中で具体的に実現されなければなりません。

この教えは、人間存在の目的を「関係」と「家庭」の中に見いだす点に特徴があります。

個人の完成だけでなく、夫婦、親子という関係の中でこそ、創造目的が実現されるとするこの視点は、現代社会においても深く考えさせられるものです。

私たちは、自分がどのような存在として生きるべきかを改めて問い直す必要があります。その問いに対する一つの答えが、「統一原理」の『真の家庭を成す』

という創造目的の中に示されているのです。

第3回 数理的に摂理なさる神

(1) 数理的に摂理なさる神

聖書のヨハネの黙示録では「六六六数」を語りました。「六数」はとても悪い意味になっています。私たちは七数へ行っては六数にきっかり合うのです。元来は、六数で創造を完了し、七数で完成して八数へ行こうとして、六数に落ち、墮落するようになりました。ゆえに「六数」に落ちたと計算することができます。七数というのは、「神聖であれ」という意味の数であり、また、「完成せよ」という意味の数です。

神が数理的に摂理なさるのは間違いありません。心情も数理的に実を結びし、犯罪も数理的に実を結びます。不平、不満を言う心で何数かが過ぎゆくようになれば、罰を受けるようになります。罪を犯したのに罰を受けない人がどこにいますか？ 不安と苦痛で何数かを過ぎれば財産がなくなったり病気になるったりします。これは、宇宙の法則です。数理的に見るとそうなのです。

心に不平と不満をもちながら一定の期間が過ぎたのちに、経済的に打撃を受けたり、何かとにかく驚くようなことが生じるようになっていきます。なぜならば、善と悪の判断をしなければならぬからです。それを審判だとも言うことができます。驚くことというのは審判です。

つまらない考えをしている人は、そういうことに一度は遭うようになります。KAL機事件も世界がひどく驚くことをして、すぐに分かれたではありませんか？ 奇跡というのは、驚きです。十災禍を見れば全部とても驚くようなことではないでしょうか？

十災禍の内容を分類して見れば、モーセとアロンが一緒に一回、アロン一人で二回、モーセ一人で、六、七、八、九の四回を行いました。そして、神お一人で四、五、十の三回を行われました。このように奇跡を行った主体が四種類に区分されるということです。

パロの降伏は、聖書によれば四、七、八、十の四回でした。

災害の種類を大きく分ければ、三種類と見ることができます。まず一種類目は一、三、四、六、九という血を流すようにした災害です。五回にわたって血の災害を下したのですが、その内容は、ぶよ、あぶ、皮膚病、長子を打つこと、そして川の水を血に変えたことです。

二種類目は虫による災害です。このかえる（注：これが虫と言えるのか分からないが）と八のいなごという虫による災害を下しました。

三種類目は、五、七、九の天による災害すなわち、天災です。その内容は、家畜たちが病気にかかって死に、ひょうが降り、暗やみが地を覆ったことです。

以上のように奇跡の種類が四種類であることを知りましたが、その中にどのような意味があるかを調べてみます。

モーセとアロンが一緒に行い、アロンだけが行い、モーセだけが行い、エホバの神だけが行われたというのは、モーセとアロンとエホバの神の三人が分担してされたり、一緒にされたりもしたということです。

神は、私たちが神の仕事になそうとすれば、私たちと一緒にされたり、またご自身がお一人でされたりするのです。このことから、天が私たちに、あることを任せたからといって私たちだけですべてをするのではない、ということ学ぶことができます。

(『聖書の中の心情圏』 p128 「数理的に摂理なざる神」より)

(2) 解説

1 六数と七数—完成直前での逸脱

ヨハネの黙示録 13 章 18 節には『六百六十六』という数が記されており、これは古来から多くの解釈を生んできました。

この教えによれば、本来の創造は、六数で創造が完了し、七数で完成し、さらに八数へと発展するという構造を持っていました。

しかし人間は、完成に至る直前の段階、すなわち六数の位置で墮落したと説明されます。そのため六数は、未完成、あるいは墮落に結びつく数として理解されるのです。

一方で七数は、「神聖であれ」「完成せよ」という意味を持つ数とされます。つまり六数は完成直前の分岐点であり、七数は完成と聖別を意味する段階として位置づけられます。

ここで重要なのは、墮落は無秩序に起こったのではなく、本来の成長段階の中で起こったと捉えられている点です。

2 数理的摂理—心情も結果も法則に従う

次に強調されるのは、「神は数理的に摂理される」という点です。

これは、神の働きが単なる感情や偶然ではなく、一定の法則性の中で展開されるという意味です。ここでは特に、人間の心情と結果の関係が数理的に結びついていると説明されます。

たとえば、不平や不満を持ち続け、その状態が一定の期間続くなれば、やがて何らかの形で結果が現れるとされます。それは経済的な打撃や健康の問題、あるいは予期しない出来事などとして現れるというのです。

ここで言われているのは、単純な因果応報というよりも、内面の状態が時間の経過とともに結果として現れる構造です。したがって、心情もまた原理原則に従

い、善も悪も一定の過程を経て実を結ぶという理解になります。

3 「驚き」として現れる審判

この教えでは、審判の現れ方にも特徴的な説明がなされます。それは、審判が「驚き」として現れるという点です。

人は通常、日常の流れの中で自分の状態を見失いがちです。しかし一定の期間が過ぎると、突然の出来事として結果が現れ、そのとき人は驚きます。この「驚き」こそが審判であると説明されます。

聖書の中の出来事も、この観点から理解されます。たとえばエジプトの十災禍は、いずれも人々に大きな驚きを与える出来事でした。

奇跡とは単なる不思議な現象ではなく、人間の状態を明らかにし、分岐を促す出来事として捉えられているのです。

4 十災禍に見る数理的構造

さらにこの教えは、十災禍そのものにも数理的な構造があると説明します。

まず、奇跡を行った主体は四つに区分されます。それは、モーセとアロンが共に行ったもの、アロンが単独で行ったもの、モーセが単独で行ったもの、そして神ご自身が行われたものです。

これは、神と人間の関係が固定されたものではなく、共に働く場合、人間に任せられる場合、神が直接行われる場合など、状況に応じて変化する協働関係であることを示しています。

また、災害の内容は三つの種類に分類されます。血に関わる災害（川の水を血に変えること、ぶよ、あぶ、皮膚病、長子を打つことの五回）、生物による災害（かえるといなごの二回）、そして天による災害（家畜の疫病、ひょう、暗闇の三回）です。このように区分できること自体が、出来事が無秩序ではなく、一定の体系の中で起こっていることを示しています。

5 神と人間の協働構造

この教えの結論は、神と人間の関係の理解にあります。

神はすべてを一方的に行われるのではなく、人間と共に働かれる場合もあり、人間に任せられる場合もあり、また神ご自身が直接行われる場合もあるという構造を持っています。

したがって、神の働きは「神だけ」でも「人間だけ」でもなく、両者の関係の中で展開されるものです。

ここから学ぶべきことは、神から任されたことがあるからといって、それがすべて人間の力だけで行われるのではないという点です。同時に、神が共におられるからといって、人間の責任がなくなるわけでもありません。

まとめ

ここまで見てきたように、「数理的に摂理なざる神」という教えは、神の働きが偶然ではなく、秩序と法則の中で展開されることを示しています。

六数と七数は成長段階と完成の構造を示し、心情と結果は時間を通じて結びつき、審判は「驚き」として現れ、歴史的出来事も数理的構造を持ち、神と人間は協働関係にあるという理解に至ります。

信仰生活とは、単に感情的に生きることではなく、このような秩序の中で自分の状態を見つめ、どの段階に立っているのかを自覚しながら歩むことです。

神の摂理が数理的であるということは、人間の生き方もまた無秩序であってはならないことを意味しています。

自分の内面、時間の使い方、関係の持ち方、そのすべてが結果へとつながる過程であることを自覚することが、信仰生活において重要と言えるでしょう。

第4回 心情の因縁を結ぼうとするならば

(1) 心情の因縁を結ぼうとするならば

右側の強盗には、情的に主の価値が分かりました。その点は、実に良かったのです。また、情的に復活をしました。情的に主に対する愛着と価値を感じたということです。この右側の十字架の信仰は、情的に主に対する事情を感じ、主を大切に思っただけの心があったのです。それで「樂園に行かれるとき、私を記憶してください」と切に要請したとき、主が「きょう、わたしと一緒に樂園にいるであろう」と答えてくださいました。情的に相当に近くなったので樂園に共に行くようになったということです。

人が情的になじむならば一緒に生きるようになり、情的にひびが入れば別れるようになります。情的に疎通がなされるならば、肉身は離れていても心は共に生きるようになるのです。そして、あの世に行くならば本当に一緒に生きるようになります。イエス様も右側の信仰者が情的にすぎりますから、一緒に行こうと言われました。

マリヤという女性が油を注ぎながら主が去られるのを痛哭するときに、「私のみ言が伝えられる所に永遠に記憶する」と称賛なさいました。その人は、地上で永遠なる天の国に登録されたのです。何で登録されたのかといえれば、涙で登録されました。その涙は結果であり、情的に登録されたといえるのです。イエス様と情で因縁を結んだのです。

今日、私たちの教会ではこのような人はまれです。左側の十字架の信仰者は多いのですが、右側の十字架の信仰者はまれです。右側の十字架の信仰者は、原理的には、信仰の基台をもった人であるということが出来ます。祝福を受ける前段階まで来た信仰者だと見るのです。

統一教会に入ってきて祝福を受ける人であるならば、少なくとも右側の十字架の信仰はもたなければならないということが出来ます。右側の十字架を負った人は、大変、重要な方です。主が地上におられるとき従わなかったとしても、その心が立派であるということは証明されます。主が過ちもないのに十字架を負われると、そのように痛々しく思っていた右側の強盗の心を見るならば、主が悲しみを抱いて入って来られるときに痛哭していたマリヤと同じく、実に驚くべきことです。これは普通の人ではありません。

私たちは自分の気がくさるならば、他人が気をくさらせるのを心配するひまがないし、自分が空腹ならば、他人の事情を知る余裕がなくなります。自分がやるせなければ、自分よりももっとやるせない方を心配する余裕がなくなるのです。ところが、この右側の強盗は、自分の体から血がたらたら流れるのにイエス様のことを心配することができたというのです。これを見るならば、彼はイエス様と心情的に近い人です。

イエス様も神のみ旨をもって来られて、他人が不信することをご自身が背

負い、ご自身の体に苦痛がありながらも心配されました。右側の強盗は、それと同じです。善なる方を心配したというその心は、いかばかり驚くべきことでしょうか？

それは、自分が食べたいものを食べず、父母に召し上がってくださいと勧める孝子女にもつながります。互いに和睦する家庭を見れば、子供たちが、自分の苦勞が多いときでも、父母の苦勞の多いのを先に心配します。また、教会でも自分が苦勞するたびに、教会の責任者はいかばかり苦勞が多いことかと心配する信徒もいます。自分の考えを主体とする分別のつかない信徒もいますけれども、自分の心配事を通じてより主体者を心配する孝誠に満ちた信徒もいるのです。

(『聖書の中の心情圏』 p306 「心情の因縁を結ぼうとするならば」 より)

(2) 解説

1 右側の強盗に見る「情的信仰」

本文の中心にあるのは、十字架上の「右側の強盗」の姿です。

この人物は、知的にイエスを理解したわけでも、長年従ってきた弟子でもありませんでした。しかし彼は、十字架の上という極限の状況において、イエスの価値を「情的に」理解しました。

ここでいう「情的」とは、単なる感情ではなく、情動的な共鳴を意味します。彼は、苦しむイエスの姿を見て、その無念さ、正しさ、尊さを直感的に感じ取ったのです。

その結果、「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」（ルカによる福音書 23 章 42 節）と願い出ます。

この言葉は、単なる救いの要求ではなく、イエスに対する深い信頼と愛着の表現です。

それに対してイエスは、「よく言うておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」（ルカによる福音書 23 章 43 節）と応えられました。

これは、情的な一致が成立した結果として、共に楽園に入っていく関係が結ばれたことを意味しています。

2 情的関係が決定する「共に生きる」か「離れる」か

本文はさらに、「情的な関係」が人間関係の本質であることを強調します。

人は、情的に通じ合うならば共に生きるようになり、情的にひびが入るならば離れるようになるということです。ここで重要なのは、物理的な距離ではなく情動的な距離です。

たとえ肉体が離れていても、情的に結ばれていれば心は共にあり、逆に近くにいる、情的に断絶していれば共に生きているとは言えません。

この理解は、霊的な世界にもそのまま延長されます。すなわち、情的に結ばれた関係は、死後においても持続し、共に存在するようになるとされます。

右側の強盗がイエスと共に楽園に行ったのも、この情的な一致によるものだと説明されているのです。

3 涙による登録—マリヤの心情

同様の例として、マリヤの行動が取り上げられます。彼女は、イエスが去られることを深く悲しみ、涙を流しながら香油を注ぎました。

この行為に対してイエスは、福音が宣べ伝えられる所ではどこでも、この女性にしたことが記念として語られるであろうと称賛されました。

ここで強調されているのは、その行為の外面的な価値ではなく、内面的な心情です。マリヤは、イエスの事情に共鳴し、その悲しみを自分のものとして感じ取っていました。

本文では、これを「涙で登録された」と表現しています。つまり、天の国における価値は、知識や功績ではなく、心情によって刻まれるという理解です。

これは、右側の強盗と同様に、「情によって因縁が結ばれる」ことを示す具体例です。

4 右側の信仰と左側の信仰

左側の強盗は、ルカの記述によれば、「あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ」（ルカ 23 章 39 節）と言い放ちました。

これは、イエスを自分の利益のために利用しようとする態度であり、主の事情に心を向けるものではありませんでした。

本文はさらに、右側の強盗と対比される左側の信仰者に言及します。

左側の強盗は、同じ状況にありながら、イエスを理解することができませんでした。これは、外的条件が同じであっても、内面的な状態によって結果が大きく異なることを示しています。

「統一原理」で言えば、右側の強盗の信仰は「信仰基台」を持った段階にあるとされ、祝福に至る前段階の信仰として評価されます。

つまり、単に信じるという段階を越えて、心情的に主と結ばれる段階に入っているということです。このような信仰が、真の関係形成の基準とされているのです。

5 極限状況に現れる心情の真価

右側の強盗の特筆すべき点は、自らが極限の苦しみの中にありながら、なおイエスのことを思いやったという点です。

通常、人は自分が苦しいとき、他者を顧みる余裕を失います。しかし彼は、自分の痛みを越えて、イエスの苦しみに心を向けることができました。

これは、単なる同情ではなく、深い心情的同一性を示しています。自分の立場を越えて、より大きな存在の事情を感じ取ることができる心、それがここで評価されているのです。

この姿は、イエスご自身が人々の不信や苦しみを背負われた姿とも重なります。すなわち、善なる存在のために心を痛めるという点において、同質の心情が見いだされるのです。

6 日常における心情の実践

本文は最後に、この心情が日常生活の中でも現れるべきものであることを示します。

たとえば、食べ物を自分のために取るのではなく、父母に勧める子女の姿や、自分の苦勞よりも父母や責任者の苦勞を先に心配する姿が挙げられます。

ここで語られているのは、「主体を先に思う心」です。自分中心ではなく、より大きな存在を優先して考える姿勢こそが、心情の成熟を示すものとされています。

教会生活においても同様であり、自分の事情にとらわれるのではなく、全体や主体者の事情を思う信徒こそが、真の信仰を歩んでいるとされます。

まとめ

ここで語られている核心は、「心情によって因縁が結ばれる」という点にあります。

右側の強盗やマリヤのように、主の事情を自分のものとして感じる心があるとき、人は主と深く結ばれるようになります。その関係は、単なる知識や形式を超え、存在そのものを結びつけるものとなります。

信仰とは、正しい理解を持つことだけではなく、主の心情にどれだけ近づくことができるかという問題です。そしてその心情は、極限状況だけでなく、日常の小さな行動の中にも現れます。

自分を中心とするのではなく、主体を思い、他者を思う心。このような心情をもって生きるとき、人は真の意味で天と因縁を結ぶ存在となるのです。

第5回 哀れみの心情があつてこそ心霊が結実

(1) 哀れみの心情があつてこそ心霊が結実

特別に私たちが注意しなければならないことは、哀れみの心をもつことです。哀れみの心を失わないでおきましょう。このような結実期に哀れみを失ってしまえば、自分の霊人体や行動全体が誤るということを記憶してください。哀れみを失わないようにしなければなりません。愛を失わないようにしましょう。他人の欠点を見るときも、その人のために祈禱し心配してやる心をもたなければなりません。その人が、よくないと、パッと切って分別したり批判せずに、心痛く思い、「実に困った、私のゆえにあのようになった」と心配をする人であつてこそ、情的にも外的にも、だんだん成長するというのです。

統一教会の信徒である私たちは、原理を誤って聞くなれば、高慢になりやすいし、富みやすいのです。また、原理が分かったとって、原理の分からない人を無視しやすいのです。

少し前に話しましたように、先生のお名前で私が世界一周したとき、「やあ！ 統一教会は、良いことは良い」と思って、まかり間違えば、自分という人間を再創造する過程から脱けやすいということを感じました。自分を再創造することから脱け出る危険があります。「自分」という人間を再創造するために教会に入ってきたのに、まかり間違えば自分を肯定して、このような環境圏内でまた、誤りやすいのです。

(中略)

今日まで神の摂理が挫折した理由は何でしょうか、イエス様が十字架に行かれた理由は何かと、神の事情を知っていかなければなりません。ペテロは、自分を肯定する信仰をしたので逃げ出すようになったのです。結局、自分を愛したというのです。一言で言うならば、主と分かれて自分を肯定するので、神の怨讐になったということを、私たちは歴史を通じて見ました。それで、きょうこの時間、初めの行為をよく保管していくなれば素晴らしくなることができるということを申し上げるのです。

ここに座っておられる皆さんの中に、収支を合わせようとして入ってきた人がどこにいますか。原理を聞き、み旨を知って、み言の前に屈伏するようになりました。それは、善なる心です。自分を否定し、原理を肯定しました。ですから、善なる心ではないでしょうか？

人がみ言を聞いて「信じます」と言うのは、善なる心の始まりです。その初めの行為を捨てないでおきましょう。むなしく眠っていて、過程で自分を肯定し、主体者を失って出ていった人がいます。統一教会をやめた人はいるのですが、その理由は初めの行為を持続せずしては、行くことができない道だからです。

皆さん、きょう、この三つの教会の称賛ととがめを通じて、心にとどめておかなければならない教訓は、哀れに思う心を保管しようということです。哀れみです。涙で悔い改める者は、哀れみを受けることができるし、また、他人を哀れに思うことができるのです。

皆さん、哀れみの心情を抱いていきましょう。哀れみの心情とは、神のように善なる人を見れば慕うようになり、自分より出来の悪い人を見るならば、かわいそうに思うようになる心です。その心をもって行ってこそ終わりの日に結実すると考えて、きょう、「初めの行為をよく保管しよう」という題目で語りました。

(『聖書の中の心情圏』p327「哀れみの心情があってこそ心霊が結実」より)

(2) 解説

1 結実期における決定的要素—哀れみの心

この教えの中心は、「哀れみの心情こそが心霊の結実を左右する」という点にあります。

信仰生活には成長の過程があり、やがて「結実期」と呼ばれる段階に至ります。この段階において何より重要なのが、哀れみの心を失わないことだとされています。

ここでいう哀れみとは、単なる同情ではありません。他者の状態を見て、それを自分とは無関係なものとして切り離すのではなく、自分のことのように痛む心を意味しています。

もしこの結実期において哀れみを失うならば、霊的な存在としての基盤そのものが歪み、行動全体にも誤りが生じると警告されています。

したがって、愛を保つことと哀れみを保つことは、信仰の完成において不可分の関係にあるのです。

2 他者を見る視点—共感

本文では、具体的に他者の欠点を見るとき態度を示しています。

人は他者の弱さや誤りを見たとき、容易に批判し、切り捨てる判断を下しがちです。しかしここでは、そのような態度が信仰的には誤りであると指摘されています。

むしろ求められているのは、その人のために祈り、心配する心です。「自分のゆえにあのようになったのではないか」と感じる心を持つことが、真の成長につながるとされます。

この姿勢は、自分と他者を分離するのではなく、関係の中で捉える見方です。他者の問題を他人事として処理するのではなく、自分の責任の延長として感じるところに、心情の深まりがあります。

そのような心を持つ人こそ、内面的にも成長し、外面的にも発展していくと語られています。

3 原理理解の落とし穴—高慢

次に指摘されるのは、原理を知ることによって生じる危険性です。

本来、み言を知るとは謙遜を深める契機となるべきですが、逆にそれが高慢を生む場合があると警告されています。理解したことによって、自分が優れていると感じ、理解していない人を軽んじるようになるという問題です。

これは信仰において非常に深刻な問題です。なぜなら、知識の増加が本来目指すべき「自分の再創造」から逸脱させるからです。

本来、教会に入る目的は、自分自身を変えることにあります。しかし、環境や立場に安住し、自分を肯定し始めるならば、その目的は失われてしまいます。

したがって、理解が深まるほどに、自分を低くし続ける姿勢が求められているのです。

4 歴史に見る教訓—自己肯定の危険

この問題は歴史的事例によってさらに強調されます。

ペテロがイエスを否認した出来事は、自分を守ろうとする心、すなわち自己肯定の結果であると説明されます。

彼は主に従っていたにもかかわらず、最終的には自分を優先し、その結果として主から離れることになりました。

ここから導かれる教訓は明確です。信仰において最大の危険は、自分を肯定し始めることにあるということです。

主に結ばれる道は、自分を否定し、主体を中心に据えることによって開かれます。逆に、自分を中心に据えるならば、結果として神の方向とは反対に進むことになるかとされます。

5 初めの行為を保つということ

本文は繰り返し、「初めの行為を保つこと」の重要性を強調します。

人がみ言に出会い、「信じます」と応える瞬間には、自己を否定し、真理を受け入れる純粋な心があります。この初めの姿勢こそが、信仰の出発点です。

しかし、その後の歩みの中で、人は次第に自分を肯定し始め、主体を見失う危険にさらされます。その結果、道を離れてしまう人も出てきます。

したがって、信仰生活とは、新しい何かを付け加えることではなく、この初めの姿勢をいかに保ち続けるかという問題であると言えます。

6 哀れみの心情と悔い改め

最後に、哀れみと悔い改めの関係が示されています。

涙で悔い改める者は、哀れみを受けると同時に、他者を哀れに思うことができるようになります。つまり、自分の弱さを知ることが、他者への理解と共感を生むのです。

ここで語られる哀れみとは、神の心情に近づくことを意味します。善なる人を見れば慕い、未熟な人を見れば見下すのではなく、かわいそうに思う心を持つこと。それが神に似た心であるとされています。

この心情を持ち続けることによってこそ、終わりの日において真の結実に至ると結論づけられています。

まとめ

信仰の結実期において問われるのは、知識の量でも功績の大きさでもなく、哀れみの心を失わずにいられるかどうかです。

他者を裁くのではなく心配する心、自分を高めるのではなく否定する姿勢、そして初めに抱いた純粋な信仰を守り続けること。

これらはすべて、哀れみという一つの心情から流れ出るものと言えます。この心を持ち続けることこそが、最終的な結実へと至る道なのです。